

## 摩耶山有情

日本山岳会 No.7734 木村喜代志

新卒で赴任地、鶴岡に向かう列車内で漠然と思い浮かんできたのが、まだ見ぬ山、摩耶山であった。鶴岡に就職が決まったとき、山形在住の先輩 M さんに報告方々挨拶に伺った。以前、鶴岡で生活されたということで、鶴岡人気質や城下町特有の道路の複雑さなどを語っていただいた。そして、自ずと山の話になり、面白い摩耶山があることを知った。

高校で山岳部に入り、蔵王連峰や雁戸山から始まった山登りは、年を追って大きな山、高い山へと興味が移っていった。そんな自分が再び地元の山に引かれ始めたのが、MK さんとの摩耶談義だった。以来、今日まで摩耶山は心に残る大きな山の 1 つになっている。

摩耶山は、古くは都岐沙羅柵の守護神として崇敬を集め、平安初期には仏教の影響を強く受け仏母摩耶夫人信仰の対象となり、後には金峯派修験の奥の院として隆盛を極めていた由緒ある名山であると聞いた。

朝日連峰の山々を登り終え、大鳥池から庄内に降りてくるとき、左手にごつごつした摩耶山塊が見えてくる。しかし、月山、鳥海山、以東岳などなどの山々が並ぶ庄内にあってはよほど意識しない限り人目を引くことはない。従って、県外はもとより、県内でも庄内以外から登りにくる人は少ない。摩耶山は認知度からすれば不遇の山といえる。

摩耶山は、朝日山地と同じく花崗岩を基盤としている。そのうえ、ほぼ南北に走る2本の断層によってできた地壘山地である。この地質的な特徴に加えて、根雪期間が120日を越す多雪地帯のため、雪による侵食が摩耶山を磨き、研ぎ上げ、衝立のように立っている。東北の山の特徴であるゆったりとした山並みとは縁遠い。加えて、冠山(中岳)と南岳(後岳)と2つのドーム状の岩山を従えた特異な山である。

旧朝日村上田沢から倉沢に向かうと、橋を渡った左手の河岸段丘面に厩神社と馬頭観音堂が併置されている。これらはその昔、須佐之男命が龍馬でこの山に登ったとされることから「厩山」と呼ばれ、馬室繁栄に由来するとして大いに信仰を集めていたことに始まるという。後に、仏母摩耶夫人信仰の真言宗の霊場として、今日の「摩耶山」に改称したと伝えられている。

倉沢、東側から賀須伊峰の登りは、ヒメコマツの茂る一の坂、二の坂、三の坂、慶月の坂と急坂が続く。落ち葉の中から顔を出すイワカガミの艶のある深緑の葉が単調な登りを慰めてくれる。5月中頃、この痩せ尾根まで突き上げてくる小沢を覗くと、細いながらもウドがよきよきと顔を出している。欲丸出しでザックを重くし、山頂をあきらめたことが何度かあった。

急な登りの賀須伊峰から右手の沢、崩壊と雪崩によって転げ落ちた巨岩に埋まる御沢に降り、15,6歩登って左岸に移る。またしても鼻をこするような斜面が続く。御沢で補給した水分が汗となって噴出す頃、白い岩肌を流れ落ちる水月に着く。口すすぎ、手洗い、足洗い

の三段に分かれた襖所である。高度感に酔いしれ、ついつい長居をしてしまうところだ。

かつて行者の修験の場だったところだけに鎖、鉄の梯子の掛かる登りが続くが、ほどなくして、御沢上流部の全貌を望めるところに出る。雪渓に埋まる沢の中央部に大きな三角錐の岩塊が、あたかも島のように座している。その昔、須佐之男命が龍馬で登ったとき、馬を繋ぎ止めたとされる駒の森だ。5、6歩沢に近づくと、足元から基盤の花崗岩が所々に露出し、又マガヤの茂る斜面が広がっている。岩の白と植物の緑の斜面は自然の巨大な画布で、ピンクのヒメサユリが描かれていく。厳しい修験や、ややこしい伝説の世界を離れ、可憐な花園をただ眺めながら長い休息になるところである。また、この付近の雪は9月まで残る。融雪期に入る頃、朝日連峰と月山から吹き降りてくる寒冷気流に覆われるためといわれているが、900mにも満たない海拔だけに、この地の多雪ぶりがうかがえる。最後は覆いかぶさるようなソリクラの岩場中腹を横切り、稜線に達すると、1050mの頂きは目と鼻の先。花崗岩の風化した山頂には、剥きだしの一等三角点がやや傾きながら建っている。

山頂からの展望は、かつての庄内藩が防衛上の要害の地として地図に記さず、山に入ることを禁じていたほどである。朝日連峰赤見堂岳から月山弥陀ヶ原までの山並みは、高原に近いならかさで横たわっている。これとは対照的に鳥海山が海からすーと天に向かって聳えている。さらには、粟島、佐渡そして遠くは能登半島まで視界に入る。

関川、越沢の西側は、ブナの原生林に一面覆われているが、山頂近くになると樹高4～5mで、あたかも自然の風向計のように頭をそろえて斜面を這い登っている。東側は崩れ落ちる雪の侵食で足元からスプーンでえぐられたように落ち込み、植生は不安定だ。しかし、注意深く見ると狭い稜線の東よりにシャクナゲ、冠山と南岳の通称奥摩耶の岩肌にはコケモモの群落、主稜線から伸びる北斗峰にはコメツツジなどが根を張っている。1000mそこそこの山にしては、植生的にも特異な山だ。

鶴岡に来て最初の冬、落合から歩いて白い摩耶山に向かったことを思い出す。あの頃、摩耶平には点々と炭焼き小屋があり、心落ち着く香りを雪上に漂わせていた。まだ夜の明けきらないうちに炭焼き小屋を発ち、深雪と雪壁の北斗峰を、ただ馬力を頼りに登ったことを思い出す。ところが、山頂で一息も着かないうちに、これでの晴天が吹雪となり、雷鳴とともに大粒の霰の襲来と、猫の目のように変る天候に驚き、呆れたことがあった。

翌年、春の知床半島スキー行に備えて西側の越沢に伸びてきている尾根からスキーで登った。ブナの木々の間を吹き上げてくる風は、雪を凍らせていた。東側に張出した雪庇は上に伸び、先端で猛禽類の嘴のように丸まっていた。また、不安定な深雪と岩稜の賀須伊峰を経て奥摩耶に真直ぐ登るコースに誘われた時は、迷わず尻込みしたこともあった。

朝日連峰の八久和谷遡行の前に入ったケンジョウ沢では、狭い廊下状の滝や瀬に時間を取られ、途中から夜の帷との競争となったこともあった。やっとの思いで達した稜線は、地面に足の届かない藪に加えて雨の歓迎を受けた。3月下旬から4月にかけて、摩耶山の頂を踏みしめてから金峯山まで、陽光を照り返す日本海を眺めながらの縦走は、何故か鼻歌が出る

ほど長閑で楽しかった。

山頂から関川、越沢へ少し降ったところに厩神社の奥の宮がある。先の駒の森にまつわる霊験によって祀ったという。路はブナの原生林の中へと吸い込まれていく。東側の路と異なり高度感はなく、淡々と降るのみだ。途中、ブナの巨木の下に、摩耶山中唯一の避難小屋が建っている。床板は一枚もなく、雨を凌ぐだけの素朴なものである。5,6年前、アケビが色づく頃、ひとりで登っている時だった。突然木々が揺れだし、聞きなれない鳴き声に立ちすくんだことがあった。見ると、ふさふさした毛並みのサル、10匹ほどの群れが木から木へとじゃれあいながら過ぎていった。ここから20分ほど降ると、花崗岩の基盤岩をなめて流れる七ツ滝が現れる。連続する滝壺は天然の白い湯船だ。汗で汚れた手を洗い、塩の噴出した顔を洗っているうちに、誘惑に負け何度か湯舟代わりに利用したこともあった。程なくして、弁財天滝に出る。これまでの様相とは一変し、渓谷美の摩耶へと変化する。滝の直ぐ下流に、須佐之男命が来たときの馬蹄の跡だという丸い凹地、甌穴が河床に見られる。地形的に云々するよりも素直にうなずきたくなる小穴が浅水を被って不規則に残っている。

摩耶山は1020mと決して高い山ではない。積雪期を除けば、どのコースをたどっても日帰りが可能だ。高さ、規模だけから見れば、何処にでもある平凡な山だ。血気盛んな頃、もう500m高ければなどと考えたことがあった。しかし、1500あるいは2000mの摩耶山だったら、忘れ去られたような長閑さ、静かさは完全に消えうせていたに違いない。

摩耶山は登る人の求めるものを忠実に、しかも直ぐに跳ね返してくれる山だ。それだけに奥が深く、飽きのこない山である。決して意気込んで立ち向かう山ではないし、かといってただ眺めるだけの山でもない。大きな山行あるいは長期の旅に出る前、あるいはその後に、ごく自然に脚の向く山で、心に息づく山である。

(1988年、2009年加筆)